

「島引きおに」を読んで

四年生

「島引きおに」を読んで

四年生

親 「このお話を読んで、どんなことを思った？」  
子 「おにがかわいそうだと思うた。」  
親 「どんなところがかわいそうだと思うたのかな？」  
子 「遊びたいだけなのに村人にだまされたりこわがられたりするところ。」  
親 「いっしょに遊びたかっただけなのにね。もし自分がおにだったら、みんなにだまされたり、にげられたりしたらどうする？」  
子 「十分くらいあばれる。」  
親 「そうか。悲しくてがまんできないよね。なんで村の人たちはおにを仲間にしなかったんだらうね。」  
子 「おににはこわいしうらぎるかもしれないから。」  
親 「じゃあ自分が村人だったらどうする？」  
子 「村長にまかせる。」  
親 「自分がどつか行けつて言ったら、ころされるかもしれないから。」  
子 「それじゃあおにがかわいそうだし、人まかせだよ。他に方法はないかな？」  
親 「まずちよつと遊んでどんなおにかを考えてわるいおにだったらおい出す。」  
子 「すぐに見た目で決めつけずに遊んでみて決めるのは、いいことだよ。学校の友だちとも、そうやっていい所をたくさん見つけられるといいね。」

【子】 私は、このお話を読んで、おにには、大へんそんな思いをくり返しているんだなと感じました。

このお話は、おにには、人間といっしょにくらしたいと思っていて、でもその気持ちを人間に分かってもらえず、おにの島に人間がやってきて、その言葉を信じて自分の島を引っぱって歩きつづけるお話です。

私は、おにが、毎日、ひとりぼっちでさびしかったという言葉が心にくりました。なぜなら、おにには、ひとりぼっちで何年も、だれも自分の島に遊びにこなかったからです。

私はこのお話を読んで、人や自分の心や気持ちを、大切にしようということを学びました。

#### 【親】

「おに」ということだけで人間から恐れられたり、「遊びたい。」という素直な気持ちを受け止めてもらえなかったりする主人公の姿から、切なさや現代でも起こりうる問題なのでは…と感じました。

「第一印象」や「見た目」が重視される世の中ですが、人や物の価値やすばらしさは、他者の一方的な見方や多数決で判断されるものではないということや、本質を見つめようとすると柔らかい心の大切さに気付き、成長していったほしいを思います。寂しい「おに」がいない、あたたかい世の中になるといいです。



「島引きおに」を読んで

四年生

「泣き虫な妹」を読んで

四年生

【子】

私が、えらんだのは「島引きおに」という本です。なんだか面白そう  
な本だと思ったけど、読んでみたらおにの方が人間よりもやさしい本で  
した。ずっと昔、日本の海に小さな島があつてひとりぼっちで住んでい  
たおにのお話でした。私が人間よりおにの方がやさしいと感じたのは、  
おにが船のりようしに「おーい、こちや上がって遊んで行け！」と、き  
ばをむきだしにしておいかけている場面を読んで、人を食べないやさし  
いすなおなおにだと思いました。それにくらべ、じいさん、ばあさんの  
いつている場面はあくしつだと思いました。最後、おには南へ南へ何年  
も歩きおにの島が波にけずられなくなつてしまのおにのかおだけういて  
いる場面がかわいそうでした。

私が村人だつたらおにと友達になります。友達がおにになつたら私は、  
村人にはなりません。

【親】

娘の優しい清らかな心に触れることができ嬉しかったです。

社会でも似たような場面に直面する時がありますが、どんな時も私も  
娘のように誠実な心で接して生きていきたいと感じさせてもらいました。

わたしも、けいちゃんと同じように妹がいます。それで泣き虫です。  
なのでけいちゃんが思っていることがよく分かります。

一回、二回読んでいくと泣き虫なともみちゃんが泣きながら教室の戸  
を開いたのでわたしはこの文を読んでけいちゃんはどうする人なんだろ  
うと思いました。つづきを読むと、ともみちゃんのがままに関わらず、  
友だちがいても少ししゃべるだけでともみを守っていました。

けんかをしているところを読んでいとけいちゃんはおこっていたけ  
れど、どんどん読んでいくとけいちゃんはずん泣き出したとかいて  
あります。そこから、本当はけいちゃんにとっては、ともみちゃんは大  
切なんだろうと思いました。

わたしも、けいちゃんのようにやさしいお姉ちゃんになりたいです。



「泣き虫な妹」を読んで

四年生

このお話は、お姉ちゃんと、泣き虫な妹のともみが登場します。妹のともみは、学校でこまったことがあると、お姉ちゃんの教室まで行って泣きながらお姉ちゃんに助けをもとめてきます。そして、二人だけでおるす番している時に、けんかをしてしまうというお話です。私の弟は、わがままで、この話でお母さんが仕事でお姉ちゃんが一生けん命お世話をしているのに、妹が「もう、おせいんだから。」とわがまを言うてきて、その時のお姉ちゃんの気持ちがよく分かりました。わたしも、いつも弟にわがまを言われて、とてもいらついてしまいます。けれど、この話のお姉ちゃんは、本当は妹が大好きで、妹にちょっと言いつぎたなーと思つて、「もう、いいよ、分かったよ。」とゆるしてあげているのがやさしいと思えました。わたしも、弟と仲良く出来るように、やさしいお姉ちゃんになれるようにがんばろうと思えました。

「鳥が魚つりをした」を読んで

四年生

どうやって魚つりをしているのかが気になってこの本をえらびました。この本を鳥が魚つりをした話です。このお話の主人公は、いろんな鳥です。「はじめはへたでもこうしたれんしゅうをつみかさねてだんだんうまくなるでしょう。」という言葉が心にのこりました。主人公の鳥の一匹のササゴイの子どもにわくわくしました。なぜならしつぱいしても次から言われたときがあります。この本を読んでぼくは、あきらめない気持ちになりました。この本からあきらめずにリベンジということをもつてすごしていこうと思います。

